

33 言語聴覚学科教官による臨床見学実習の意義について

学院 言語聴覚学科 阿部晶子, 北義子, 下嶋哲也, 坂田善政

1. はじめに

言語聴覚療法に関する臨床実習は、専門基礎科目、専門科目に関する講義・実習を履修した後に行われ、実際の臨床の中で知識を深め、技術を学ぶものである。当学科では、1年次に専門基礎科目、専門科目の講義および障害類型別の実習を行い、2年次の6月以降に当センター病院および外部施設での臨床実習を開始するカリキュラム構成になっている。

学生は、臨床実習開始時点では、講義で学んだ知識を統合して実際の患者様の状態を理解することが難しい。ここ数年、現場の指導者からは、観察時の視点が不十分、記録ができない等の問題が指摘されている。また、学生からは、その日の臨床を振り返って学んだことを、実習日誌にどのように記述してよいかわからず、記載に何時間もかかってしまうなどの相談を受けることが少なくない。このため、今年度はじめての試みとして、病院で言語聴覚士を併任している教官の臨床を見学させる機会を設けた。本発表では、教官による臨床見学実習の意義を考察したい。

2. 教官による臨床見学実習の概要

2年生28名を対象とした。4～5月に教官3名による小児聴覚障害、失語症・高次脳機能障害、言語発達障害の臨床を各1回（2～4時間）見学させた。見学後、実習日誌の提出を義務付けた。

3. アンケートによる調査

前期臨床実習（6～7月）の終了後に、質問紙調査を行った。臨床実習先の内訳は図1～2の通りで、対象とする障害類型は多様であった。実習期間を通じて、学生は平均4.5種類の障害類型の臨床を学んだ（図3）。教官による事前の臨床見学実習を、「意義があった」とする回答は89.3%と高かったが（図4）、「役に立った」とする回答は57.1%に留まった（図5）。良かった点について回答が多かった項目は、「臨床実習に対する心構えを作るきっかけになった」（78.6%）、「実習日誌の書き方を練習する機会になった」（71.4%）、「見学する際の記録の取り方を学ぶ機会になった」（60.7%）であった。一方、回答が少なかった項目は、「臨床の場にあわせて服装、髪型を整えるきっかけになった」（7.1%）、「フィードバックの受け方について学ぶ機会になった」（10.7%）、「見学した内容について、教科書やノートを調べることで知識を整理することができた」（17.7%）であった。学生が困難を感じている「実習日誌」に要する時間は、0.5～1時間が34.3%と最も多かったものの、それ以上かかる学生が大半で、2時間以上とする学生も18.8%を占めた（図6）。

4. 考察

教官の臨床見学は、臨床実習の準備として、9割程度の学生が意義を感じていることが示された。その一方で、それが直接、臨床実習を役立てることができた学生は6割程度に留まった。これは、3名の教官のみで、多種多様な臨床実習先の要求に対応することが難しかったためと思われる。多くの学生が共通して感じている臨床実習日誌の書き方がわからないという問題については、教官の臨床見学実習は練習の機会にはなっているものの、3回の練習では十分でないことが明らかになった。また、見学を終えた後、教科書やノートを調べて知識を整理するなどが十分に行われているとは言えず、主体的な学びを促すことは今後の指導課題と思われた。

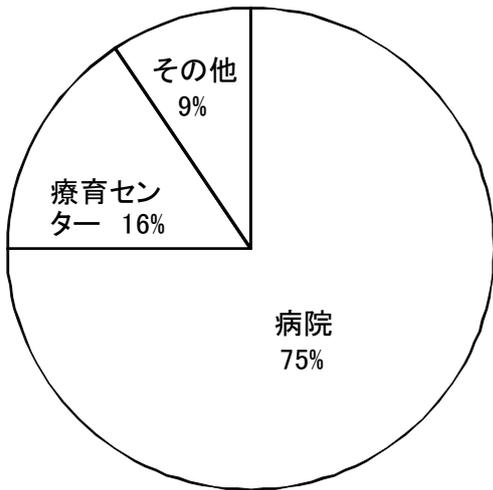


図1 臨床実習先 施設の内訳

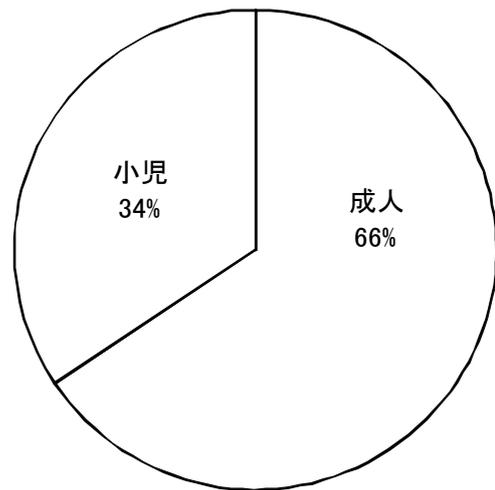


図2 臨床実習先 対象の内訳

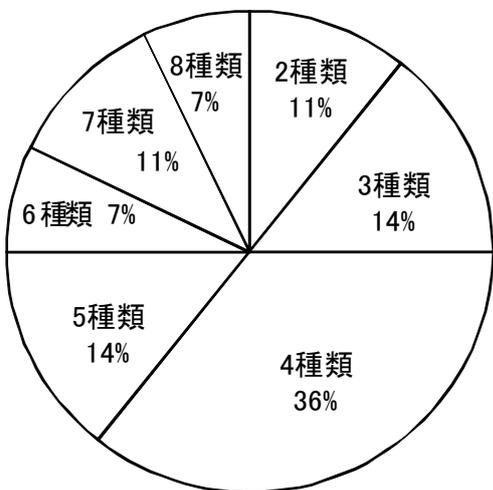


図3 臨床実習先で学ぶ機会があった障害類型数

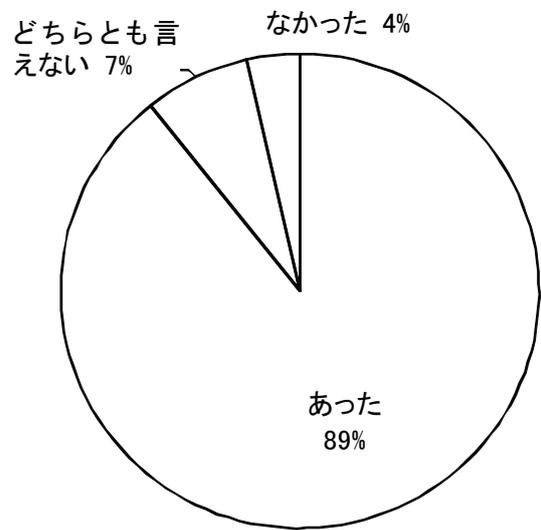


図4 見学実習は意義があったか

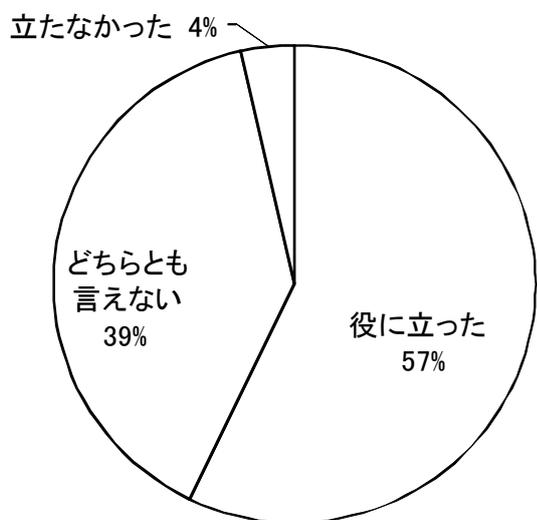


図5 見学実習は役に立ったか

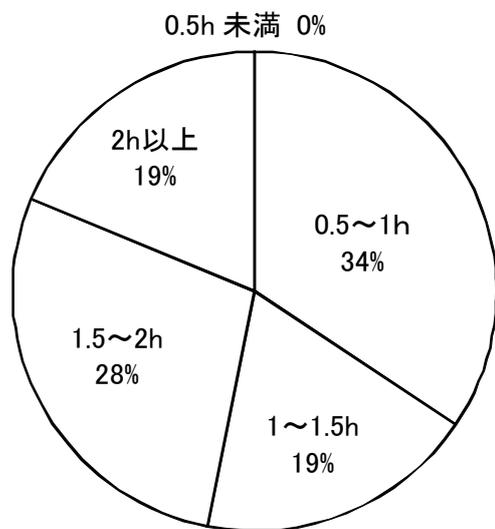


図6 臨床実習日誌に要した時間